

## 東洋女子歯科医学専門学校校長・宇田尚(第1報)

永藤 欣久

東洋学園大学 東洋学園史料室

矢数道明は「湯鳥聖堂「恩賜神農像」写真の変化について(3)」(日本漢方現代史余話(20). 漢方の臨床1994)で、湯鳥聖堂に祀られる神農像とその廟堂が駒込上富士前町の木村長久郎から同地へ遷座した際、戦時中の物資、人手不足のさなか「宇田尚理事がよく奔走されたという記録が残っている」と記している。「記録」の出典は明らかにされていないが、湯鳥聖堂を管理、運営する財団法人斯文会の『斯文』1954年第10号が典拠の一つと考えられる。「時恰も大東亜戦争の様相深刻を極め、資材労力等総て極度の拂底を告げ、事業進行上絶大の困難に遭遇したが、之が監督を担当せる本会理事宇田尚氏の熱烈なる努力(略)に依り、漸くその困難を克服し、遂に昭和十八年六月末日完全に竣工を見、同七月一日神農像を安置することを得た」(同書. 清田清. 湯鳥聖堂構内奉祀 神農像沿革)。

さらに矢数の同著(1)は1953年の東京漢方杏林会主催による戦後第2回神農祭で「宇田理事の挨拶」があったことを記し、1954年以降の祭祀を主宰した斯文会も、1967年第14回神農祭で宇田尚が所蔵する神農画像を展示したと記録している。後者の記録に基づき2014年10月24・25日に宇田家の資料調査を行い、当該する画像かは不明であるが、神農図を掲載する1721(享保6)年の冊子を発見した。

恩賜神農像が湯鳥聖堂で保存されることになった斯文会側のキーマン、宇田尚(1881~1968)は旧制東洋女子歯科医学専門学校の理事長兼校長である。同校は東京市本郷区元町2丁目、現在の文京区本郷1丁目にあって女性歯科医師を養成した。同地は現在、東洋学園大学となり歯科教育は行っていないが、宇田尚が創立者とされている。

東洋女子歯科医専は解剖実習インストラクターの香山明(1883~1969)が1917(大正6)年に設立した女子の歯科医学講習所を前身とする。同校は翌年に各種学校の明華女子歯科医学校として認可を得、次いで財団法人の設立と明華女子歯科医学専門学校としての認可を得た(1921)が、医学校として完成するために必須の文部大臣指定、いわゆる無試験開業の特典を申請する段階で蹉跎を来した。財団法人化後も実態は香山の個人経営であり、文部省歯科医師試験附属病院(院長島峰徹)が示す基準を満たし得ず、香山自身の素行問題も加わり認可は遅滞した。専門学校1回生卒業までに指定認可見込みの約束に反するとして、生徒・父兄による学校騒動に発展し、香山理事長兼校長以下役員は退陣した。宇田尚は香山明、次いで当局(島峰徹)、父兄会、三者の依頼により経営を引き受けたとしており、この時の宇田尚の顔は実業家であった。新役員は宇田尚のビジネスパートナーらのほか、日露戦争従軍当時の軍関係者が含まれる。

宇田尚は校名を東洋に改め、1926年11月4日に指定認可を得た。以後、旧制期は同日を創立記念日としている。校名は宇田尚とその実父、宇田廉平(第一高等中学校倫理学教授)が専門とした漢学、すなわち東洋思想学に由来する。この場合の宇田尚は東洋思想学者であり、斯文会もその延長線上にある。同校の教育はもとより西洋歯科医学に基づくが、宇田校長はその父が第一高等中学校で実践した倫理学、すなわち武士道的保守主義に則る人格形成教育を標榜し、より直裁に表現すれば天皇制を至高とする国粹主義を鼓吹した。

東洋女子歯科医専は1945年4月の米軍空襲で施設を焼失し、占領期の医学教育改革に際してB級判定を受け、大学昇格のため教養課程の旧制高等学校(理科)を併設したが、新制歯科大学の設置申請には至らず、短期大学英語科の認可を得て東洋女子短期大学に転換した。宇田尚自身はこの時、公職追放中であり、クリスチャンの夫人が理事長の職にあった。